

# 連載コラム 『夜より深い闇へのまなざし』（第3回）

齋藤理一郎 群馬県立前橋清陵高等学校(夜間部定時制)教諭(英語科)  
・特別支援教育士(S. E. N. S)

## 連載タイトルに込めた思い

夏から秋にかけて、大勢の前で話す機会が4回あった。夜間部定時制高校で過ごす生徒の様子や、そこで行われている教科学習(みなさん忘れているかもしれませんが、僕の担当教科は英語です)がテーマだった。僕自身の表現力不足も関係するのだろうが、フロアからは「知らない世界に触れることができた」という受容的な反響と同じく、「それって、高校生のあるべき姿からしたらどうなの？」と疑問を呈する、懐疑的な見られ方もあった。

本連載の第1回でも書いたように、「ふつうの高校・高校生とは違う、でも確かに存在する定時制高校・夜間部生徒」がいる。オトナは生きてきた中で、「ふつう・当たり前・常識」を築き上げていて、その経験のおかげで、「ちょっとやそっとじゃ動揺しない人生」を送ることができているのだろう。ただその経験は、時として「未知のもの」を「過去の出来事」と同一視したり、自分の経験に当てはまらなないと「信じられない！」と向き合わなくなったりしてしまう(自戒も込めて)。

「夜の学校」で学ぶ生徒の実態は、「夜より深い闇の世界(world darker than night)」なのか、「夜の学校」で働く自分だから「見える生徒の深い闇(dark side that could be seen at night)」なのか。どちらにしても、「この子たちが生きる姿に目を向けて！」と、(ゴシップ的な意味ではなく)読者の刺激になるような発信を続けていきたい。

## 高校生を取り巻く環境の厳しさ

前回、アルバイト先で認められて生き生きとしている生徒たちの様子を紹介した。その後、彼ら彼女らに「アルバイトはどう？近いうちにお店に寄るね」と声をかけると、「あー、そこ、辞めました」とモゴモゴ声の返事が来ることがある。辞めた理由はそれぞれで、しかも生徒から聞いただけなので、おそらく雇用者側の言い分もあるのだろう。「何か、別の

バイトを探さなきゃならないけど…」と自信なさそうな様子から、生徒側にも非がなかったとは言えない事情がうかがえる。

働いて、お金を稼がなきゃならない。ただ、まず働き口にとどり着くまでの壁が高い。そして、生徒たちが好きな、心の拠りどころでもある SNS には、「楽しんで稼げるアルバイト」の誘惑があちこちに見られる。学校では、「闇バイトはバイトではなく犯罪です。一度関わると脱け出せません」「投資詐欺に気をつけよう。うまい話には裏がある」という、群馬県警からのチラシを教室に掲示して、生徒にも注意喚起する。ときおり、表情を曇らせたり、顔を見合わせてニヤつく生徒がいる。オトナの目が届かないところで、彼ら彼女らは、すでに危ない橋を見かけている。高校生は、一步踏み誤まれば犯罪被害者にも加害者にもなりうる緊張感と隣り合わせにいる現代だ。

## 働くイメージが希薄な高校生

「なるべく楽しんで、たくさんお金を稼ぎたい」は、誰もが持つ欲望だろう。オトナはすでに、その欲望に流されて痛い目に遭った経験があったりするが、高校生にはまだ、「楽しんで稼げる仕事」は何か輝きを放って見えてしまう。「お金を稼ぐということは、苦勞するんだよ」「努力した結果、今の仕事に就けているんだよ」「仕事を続けるためには、お互いの我慢も必要だよ」のことばかけは、「苦勞・努力・我慢」というキーワードが入っているだけで、その輝きの前にくすんでしまう。

せめて、「働く姿」を高校生に伝えられるオトナ(ロールモデル)が周囲に多ければ、働くイメージも描きやすいのだろうが、家族と、あればアルバイト先の同僚や先輩と、そして「仕事としての現実味が薄い教員」がいる学校の行き来だけでは、なかなかその経験は積み上げられない。

異動と一緒に担任を始めた生徒も、春から卒業学年。「進路未定」の多さが悩みのタネだ。

(つづく)